

9/18 福 早

自衛官の家族らため息

参院特別委員会が安保関連法案を強行採決した十七日、現職自衛官の妻や母、恋人らが真っ先に思い浮かべたのは「大切な人」の未来だった。

中部地方に住む女性は今年、陸上自衛官と結婚した。「参院特別委で可決」な。十七日は法案の行方が気になって、職場の給湯室

で見て「自衛官一人一人の命のことを考えてくれているのだろうか」と思った。夫は結婚前から「自分は海外に行く可能性がある」と話していた。海外に派遣された場合の訓練をしていることも、結婚後に知らさ

れた。七月に法案が衆院を通過したころ、自衛隊の海外活動をめぐって、初めて夫婦けんかをした。「国を守るために、俺は海外でも銃を持つ」「銃を持たなくても国は守れるんじゃないの」

最後に夫が「国益だと信じてやるしかないんだよ」と言ったとき「海外で戦死する自衛官になってしまっ

十代の女性。特別委での可決を知り「もう少し審議して、できれば廃案にしても良かった」とため息をついた。

のでは」という不安と恐怖が心に湧いた。法案には反対だ。「でも、自衛官の妻が反対しているなんて周りに知られたら、夫に迷惑が掛かる」。そう思い、誰にも相談できずにいる。自衛官と交際している二

交際を始めたとき、彼に「危険地域に赴く可能性がある」と言われ、理解したつもりだった。今も「命令なら従っしかない。そういう仕事だ」と言われるが「私にとっては彼の命が大事。本当は危ない所に行ってほしくないんです」。

用されてしまつかも知れない。そう考えると怖い」と、本気の気持ちを明かす。一方、娘婿が西日本の駐屯地に勤めている五十代の女性は十七日、新聞の求人広告を切り抜いた。娘婿が帰ってきたら、自衛官を辞めて再就職するよう促すつもりでいる。

娘婿は任務に忠実だが、法案には反対している。「国を守るのが前提で、海外に派遣されるために入隊したわけではない」と話しているという。

国民の命を守るのが、自衛官の仕事。そんな厳しい仕事に命を懸けられる相手を誇りに思っている。「でも、彼の純粋さが戦争に利

だが、現職自衛官である以上、上官や部隊の仲間を中心に打ち明けられない。(細井卓也、浅井俊典)

「戦死」の不安募る